

〈投稿論文〉

「ポストヒューマン時代」における「世界観＝人間観」 の問題について

—現代科学技術とリベラルな価値体系、「人間性」をめぐる諸問題—

On the Problem of "World-View/Human-View" in the "Post-Human Era":

Problems Concerning Contemporary Technology, Liberal Value System and
"Humanity"

上 柿 崇 英*

Takahide UEGAKI

キーワード：ポストヒューマン、ポストヒューマニズム、人間性、新
反動主義、〈無限の生〉の「世界観＝人間観」

1. はじめに

人間は、技術の力を用いて自らの環境を改変してきた。そしていまその矛先は、人間存在のあり方そのものに対して向けられている。実際、ビッグデータから「最適解」を導くAIは、労働、サービス、交通、戦争までも広く自動化させつつある。やがてわれわれは、人工臓器、ナノロボット、老いの「治療」などを通じて、若々しい肉体のまま250歳まで生きられるようになり、プレイン・マシン・インターフェースを通じて、金属製の新たな四肢さえ動かせるようになるかもしれない。糞をするペットに代わって、今度は自分好みにカスタマイズされたアンドロイドが、優しく労りの言葉をかけてくれるようになるかもしれない。われわれが生きているのは、こうして身体と機械、脳とAI、治

*大阪府立大学 Osaka Prefecture University

療と人体改造との境界が曖昧となり、これまで自明とされてきた「人間」の概念が通用しなくなる時代である。それを本論では「ポストヒューマン時代」と呼ぶことにしよう^(注1)。

こうした事態について論じるとき、われわれの反応は多くの場合二つの極端なものとなる。すなわちそれが人間の可能性を向上させるとする「技術的ユートピア」の立場と、それが新たな形の疎外状態や管理社会をもたらすとする「技術的ディストピア」の立場である。しかし、本論が注目したいのはそこではない。むしろ一見無関係にも思える、今日のリベラルな価値体系をめぐる対立軸である。すなわち、一方では新反動主義(neo-reactionary)とも呼ばれ、人権、民主主義、多文化共生といった近代の進歩的な遺産をも否定しようとする人々と、あくまでそれを防衛し、ときに伝統的なヒューマンイズムの問題点——例えば男性中心主義や西洋中心主義といった——をも乗り越えていこうとする人々との間に引かれた対立軸である。実は、「ポストヒューマン時代」の問題と、リベラルな価値体系をめぐる問題とは互いに密接に関わっている。というのも後者の対立が、われわれが真に「人間らしい」と認識している何ものか、すなわち「人間性」をめぐる異なる理解に由来するのに対して、前者の問題とは、身体を含む、まさしくその「人間性」の基盤となるものを技術的に操作することから生じるものだからである。奇妙なことに、リベラルの否定者も、擁護者も、技術によって自らを改変し、「ポストヒューマンな存在」となることを次第に肯定するようになっていく。それは両者が、いずれも現実の外側にある「あるべき人間(社会)」といった理念から出発し、われわれはその「想像された何ものか」によって現実を置き換えるべきだと確信する「世界観=人間観」を共有していること、そしてそれこそが近代を近代ならしめる核心部分であるということに気付いていないからである。

本論では、そこに横たわるものを〈無限の生〉の「世界観=人間観」と呼ぶ。〈無限の生〉とは「意のままになる生」のことを指し、その「世界観=人間観」においては、人間の使命とは、「意のままにならない生」の現実を克服し、それをあるべき理念に相応しく改変していくことであると見なされる。そしてわ

れわれがこうした「世界観=人間観」に立つ限り、われわれは「人間」であろうとして、かえって眼前の現実の人間を否定し続けなければならない「無間地獄」に陥ることになる。「ポストヒューマン時代」に問われているのは、まさしくこの「世界観=人間観」をめぐる問題であるということを、本論では明らかにすることにしたい。

2. 「ポストヒューマン時代」の到来

1) 「技術的ユートピア」と「技術的ディストピア」の狭間で

われわれはまず、「ポストヒューマン時代」をめぐる二つの解釈、「技術的ユートピア」と「技術的ディストピア」について見ていくことから始めよう。

このうち前者を代表するのは、R・カーツワイル(R. Kurzweil)だろう^(注2)。カーツワイルによれば、人間の創出する技術は指数関数的に増大を続け、われわれはまもなく、自らの存在様式が劇的に変容する「特異点(singularity)」を迎えるという。脳の構造/機能の全容解明、設計能力を獲得した機械、ナノロボットによる身体能力の強化、そしてバーチャルリアリティの拡大、それらを通じてわれわれは、近い将来ついに生物学的な身体や脳の限界を超える。そしてそれは、DNAの進化、脳の進化、科学技術の進化に続く新たな進化の段階を意味しており、拡大を続ける知能は、やがては光速さえ乗り越えて、宇宙の隅々にまで行き渡るようになるというのである。

確かにわれわれは、いずれ技術によって、機械と身体が融合する時代を迎えることになるだろう。とはいえ「特異点」を迎えた人間社会が、単純に輝かしいものであるという保障はない。実際、脳の状態を電子機器にアップロードすることで「永遠の命」を獲得する、故人の残したビッグデータを用いて、アンドロイドやAIがその人らしく会話をするといった話を聞いて、多くの人々は戸惑いを覚えるだろう。他にも、例えばY・ハラリ(Y. Harari)は、技術の恩恵によってアップグレードされた人々とそうでない人々との間に生じる、想像

を絶する格差の可能性について言及している^(注3)。さらには、拡張し続ける知能が新たな管理社会をもたらすという懸念は、「技術的ディストピア」の代表的な主張のひとつである。実際、われわれは人間の個体識別が可能な無数のカメラに囲まれ、あらゆる行為の記録が特定企業や公的機関に蓄積され続けている。その情報はたして公正に運用されると言えるのだろうか。同様に、AIがはじき出す「信用スコア」によって、どれほどビジネスが効率化され、犯罪が抑止され、人々が望ましい行動へと誘導されると説明されても、人々は同じ理由で不安を募らせるに違いない。いずれにしても「ポストヒューマン時代」は、こうした二つの顔をあわせ持っているのである。

2) 「人間性」への問い

しかし本論の目的は、こうした時代の二面性について吟味していくことではなかった。本論が注目したいのは、むしろ「ポストヒューマン時代」をめぐる議論の中心部分に、常に「人間性 (humanity)」をめぐる問題が潜んでいるということである。「人間性」とは、われわれが真に「人間らしい」と認識している何ものか、言ってみれば「人間 (human)」の概念とでも呼ぶべきもののことを指している。つまり「技術的なユートピア」にせよ、「技術的ディストピア」にせよ、われわれを神経質にさせているのは、これまでわれわれが「人間性」だと認識していたものが、先に見たAIや、アンドロイドや、老いの「治療」などといった技術のあり方によって、大きく揺さぶられているからなのである。

とはいえ、われわれはいつから自らの思う「人間性」こそが、真に「人間らしい」ものであると信じるようになったのだろうか。またそれが、「人間らしさ」を体現しているという根拠はどこにあるのだろうか。こうした問いは、われわれの動揺をさらに深めることにつながるだろう。興味深いのは、これと密接に関わる問題が、一見AIやサイボーグ化とは無縁と思える、今日のリベラルな価値体系をめぐる対立軸にも潜在していることである。リベラルな価値体系とは、人権、民主主義、平等、多文化共生、博愛主義などを基盤とした、ひとつ

の人間的な理想をめぐる枠組みのことを指している。確かに歴史上、こうした価値体系は幾度となくそれを否定しようとする勢力によって脅かされてきた。しかし21世紀の複雑な政治的背景のもと、それは戦後最大級の新たな危機を迎えているようにも見える。ポリティカル・コレクトネスが火を噴くなかで、それでも少なくない人々が反発を続ける様子は、それが単なる無知や独善や思考停止といった枠組みでは説明しきれないものであることを物語っている。もちろん本論は、そうした否定の側に立つつもりはない。かといって、それを擁護する側に単純に立つつもりもない。本論が注目しているのは、あくまでこの争いの中心部分に潜在している、「人間性」をめぐる問題である。そこに目を向けることによって、われわれは「ポストヒューマン時代」を読み解く大きな手がかりを得ることができるからである。

3. リベラルな価値体系をめぐる対抗軸

1) リベラルな価値体系を否定する新反動主義

それではまず、リベラルな価値体系に対する批判的な立場について見ていこう。前述したように、リベラルな価値体系は戦後半世紀以上にわたって世界の知識社会を主導してきた。その思想的な影響力は、これまでの人文科学が、さしずめこのリベラルな価値体系を基盤として、そこから現実を照射していく学問であったとさえ言えるほどである。ところが21世紀以降になると、こうした価値体系の影響力は後退するようになっていく。知識社会が振りかざすそうした「正義」に対して、むしろ反発を覚える人々が目につくようになるのである。

こうした立場を最も先鋭化した形で表明したのは、おそらく『暗黒啓蒙 (The dark enlightenment)』で知られるN・ランド (N. Land) である^(注4)。ランドはまず、西側世界が希求してきた民主主義の伝統を徹底的に批判しようとする。いわく、民主主義はその美しい外皮を一度むけば、票の買収や政治家の贈収賄、無節操にまみれており、全体主義に抗し、民衆の声を隅々まで拾い上げるとい

う政治の理想は、合理性を欠いた暴徒たちによる罵り合いと化している。そしてその末路を暗示するのは財政破綻したギリシャであり、そこでは繰り返される問題の先送りによって、文明自体が自壊していくことになるというのである。

注目したいのは、ここでのランドの批判が、問題を抱えた現行の制度というよりも、それを背後で支える価値体系、そしてそれに向き合うわれわれの態度の方に向けられていることである。つまりわれわれが、人権、平等、多文化共生などを含む一連の価値理念を称揚するあまり、いかに現実から遠ざかり、盲目になっているのかということの問題にしているのである。このことを説明するために、ランドはC・ヤーヴィン (C. Yarvin) の「大聖堂 (cathedral)」という概念を導入する。「大聖堂」とは、一連の価値理念によって構成される壮大な体系のことを指しており、そこには知的エリートたち——こうした人々は行政、立法、司法、マスメディア、高等教育など社会的な権威を行使できる立場にある——が住んでいる。そして「大聖堂」の住人たちにとっては、その価値体系が神秘やカルト的な崇拜の域にまで達しているというのである。そうした人々は、簡単に何ものかをヘイトと断言し、自らの立ち位置を普遍主義の名のもとに正当化する。その美しい理念を少しでも毀損するなら、それは彼らにとっては絶対的な「悪」となり、存在してはならないものとなる。ランドはこうした態度を、合理的な思考や科学的根拠というよりも、ある種の「信仰」に基づいていると述べ、ヘイトに対する糾弾のことを、「大聖堂」を守護し人々を教え諭す「賛美歌」に例え、人種問題のことを、その信仰における「原罪」であると述べている。ランドがここで執拗に宗教的なアナロジーを用いる理由は、単にリベラルな価値体系の成立事情にキリスト教が関わっていたということだけではないだろう。ここには、かつての宗教的な権威を独断と偏見の温床と断じ、自らが進歩と啓蒙の代弁者であることを誇示してきたのが、他ならないリベラルな価値体系であったことへの強烈な皮肉が込められているのである。

では、そうした「大聖堂」が君臨する社会のなかで、われわれはどこへ向かえば良いのだろうか。ここでランドが「出口」を見いだすのが、再びヤーヴィンによる「新官房学 (neocameralism)」のアプローチである。「新官房学」が目

指すのは、資本制をさらに徹底した先にある社会である。ここでは国家によって資本を統制するのは反対に、国家がある種の「企業」となる。ここで国家は、収益を生み出す組織として「経営」される。その顧客は住民たちであり、彼らは税を支払う見返りとして、それに相応しいサービスを「経営陣」に要求する。そうした国家のもとでは、人々が政治に関心を持つ必要などない。人々はサービスに満足できなければ、自由に所属先を変更することができるため、「経営陣」は顧客を引き留めようとして、こぞってサービスの向上に努めることになる。こうして民主主義が不在であるにもかかわらず、そこでは個人の自由が極大化され、同時に質の高いサービスが自ずと保障されるというのである。

2) リベラルな価値体系を擁護する「ポストヒューマニズム」

続いてわれわれは、視点を180度変えて、リベラルな価値体系を擁護する立場について見ていこう。ここで本論が取りあげるのは、フェミニズム理論家として知られるR・ブライドッティ (R. Braidotti) の議論である^(注5)。そして本論がブライドッティに着目するのは、彼女の議論が既存の価値体系の問題点にも目を向けつつ、価値体系の刷新を試みている側面があるからである。

ブライドッティはまず、リベラルな価値体系が、過去にも繰り返し自己批判を行ってきたことについて確認する。例えばこの価値体系の出発点は、ルネッサンス期以降の啓蒙思想、われわれがヒューマニズム (humanism) と呼んできたものにあった。しかしそこで想定されてきた“人間”は、フェミニズムによって、女性という他者性の否定を通じて構築された男性中心主義の産物でしかなかったと告発され、またポストコロニアリズムによって、非ヨーロッパ世界の人々という他者性の否定を通じて構築されたヨーロッパ中心主義の産物でしかなかったと告発されてきた。要するに、ここにあるのは、そこで想定されてきた“理性的な主体”なるものが、結局は五体満足で肌の白いヨーロッパ人男性でしかなかったという批判であり、今日のリベラルな価値体系は、こうした自己批判を経て形作られてきたものなのである。

このとき、その自己刷新を支えたのが、社会構築主義のアプローチであった。

すなわち、民族、人種、性といった人々に引かれた境界は、あくまで歴史的に構築された偶発的な産物に過ぎない。そのためわれわれは、こうした恣意的な境界を排除し、それに基づく差別を徹底的に排除していかなければならない。そうすることで、われわれは自由と平等を行き渡らせ、民主的で開かれた社会を真に実現できると考えられてきたのである。

先に見たように、ランドを含む否定者たちが苛立ちを募らせるのは、こうした主張に付随する理念の強要と、それが現実においてもたらす多くの不合理であった。だが、価値体系の擁護者たちにも言い分はある。たとえ現実の民主主義や多文化共生が多くの綻びに満ちていようと、それは現行の制度や人々の陶冶が不十分であるというだけで、価値体系そのものが誤りであると証明されたわけではない。われわれは数多くの困難に直面するかもしれないが、だからこそ、われわれは産湯を捨てようとして赤子を捨てるがごとく、数100年の人類の英知を手放すべきではない、というようにである。

そしてブライドッティは、グローバル資本主義が遺伝子をも商品化し、無人のドローンが地球の裏側で殺傷を働き、新たな地質年代として「人新世 (anthropocene)」が論じられる時代において、リベラルな価値体系には更なる刷新が求められているという。つまり伝統的なヒューマニズムが、かつて女性や非ヨーロッパ文化圏の人々から告発されてきたように、今日ではそれが、人類からの多大な影響を被っている人間以外の生物から、AIによって自律性を獲得しつつあるロボットから、そして気候変動と気候工学の波にさらされている地球といった存在から告発され、新たな局面を迎えているというのである。

ブライドッティは、ここで社会構築主義的なアプローチを退け、代わりに「生氣論的唯物論 (vitalist materialism)」や「ゾーエー中心的平等主義 (zoe-centered egalitarianism)」といった概念を導入する。そして自然と文化を連続的に掌握できる新たな一元論に立脚しながら、人間中心ではない、ノマド的で、身体や状況、場所によって位置づけられる新たな“主体”の概念を提起する。そしてそうした主体こそが、新たな時代の人文を切り拓く鍵となるというのである。

4. 〈無限の生〉の「無間地獄」

1) リベラルな価値体系の否定者と擁護者にまたがる奇妙な共通点

さて、以上を通じてわれわれは、リベラルな価値体系をめぐる否定者と擁護者双方を象徴する言説について取りあげてきた。ここで着目したいのは、この対立の背後にあるのが、「人間性」をめぐる理解の違いであるということである。

まずランドが憤っていたのは、「大聖堂」に住まう人々が振りかざす理念であり、それがもたらす現実の不合理であった。換言すれば、ランドはここでリベラルな価値体系に内在する「あるべき人間」の姿、そこで想定されている「人間性」の理念に対して反発していたのである。ところが注目すべきことに、ここで彼らは「あるべき人間」や「人間性」といった理念の存在それ自体を必ずしも否定しているわけではないのである。なぜなら民主主義や多文化共生を退ける彼らにおいても、反面、「新官房学」に象徴されるリバタリアンのユートピア、すなわち「～からの自由」を極大化した先にある絶対的な自由という、別の形の「あるべき人間」、「人間性」の理念が、しっかりと信奉されているからである。

同様に、人間中心主義の克服を訴えるブライドッティの議論は、一見「あるべき人間」としての「人間性」の理念そのものを放棄しているようにも見える。しかし彼女のアプローチ——人間存在と“人間ではない存在”との境界を脱構築しつつ、そこに「ポストヒューマンな主体」を見いだす——を注視すれば、それが、あらゆる境界を解体し、より普遍的な価値を求め、それによって権力批判を試みてきた伝統的なリベラルの方法論と本質的には少しも変わらないということが分かる。つまり彼女は、ポストモダン的な「人間の死」を引き継ぎつつも、実際にはそこで、“人間ではない存在”との連続性から説明され、そこからあらゆる存在の普遍的な共生を導き出すという意味における「あるべき人間」の理念を、依然として希求していると見るのできるのである。

ここから理解できるのは、両者の違いが、それぞれに想定される「あるべき人間」、すなわち「人間性」の理念の違いに由来するということである。しかしそれ以上に重要なことは、将来的に実現されるべき人間の理念、あるべき「人間性」なるものがこの世界に存在するはずだという形而上学的な前提については、両者は意外なほどに一致しているということなのである。

2) 近代を支える〈無限の生〉の「世界観＝人間観」

それにしても、このあるべき「人間性」という表現自体、考えてみれば恐ろしく奇妙なものではないだろうか。というのも、「人間性」が真に「人間らしい」何ものかを意味するといのであれば、なぜそれは過去や現実においてではなく、実現されるべき未来に存在することになるのだろうか。またそれが未来に実現されるべきものだとは、未だ誰ひとりとして、その完成された姿を目撃したことなどないはずである。それにもかかわらず、ここではそれが真の「人間性」であるとの確信だけがあるのである。本論では、こうした前提のことを「約束された本来性」と呼ぶことにしよう。

前述のように、リベラルの否定者も、擁護者も、つきつめるとこの「約束された本来性」という前提を共有している。しかし驚くべきことは、こうした前提が「人間は生まれながらにして自由であるが、しかしいたるところで鉄鎖につながれている」というJ・J・ルソー (J. J. Rousseau) の言葉のなかにすでに潜んでいること^(注6)、そしてそれがI・カント (I. Kant)、G・W・F・ヘーゲル (G. W. F. Hegel)、K・マルクス (K. Marx) を経て、ポストモダンの現代思想に至るまで、きわめて広範囲にわたって展開されてきたということである。ここで貫かれている原理とは、第一に、現実の内側ではなく、現実の外側に、想像された理念として「あるべき人間 (または「あるべき社会」)」が指定されているということ、第二に、その理念から照射する形で、理念とは異なる現実の方が否定されるということ、第三に、「あるべき人間 (社会)」は、それが「真の人間 (社会)」の完成した姿であると確信されるがゆえに、現実具現化されるべきものであると理解されている、ということである。「あるべき人間性」

として、ここで何が具体的に想定されているのかということは、実はそれほど重要ではない。重要なのは、理想と現実、理念と現実とをめぐり理解において、まるで通奏低音のごとく、ここにひとつの特殊な「世界観＝人間観」が潜在してきたということなのである。

本論では、この「世界観＝人間観」のことを、〈無限の生〉の「世界観＝人間観」と呼ぶことにしよう。前述したように、それは現実の外部に“あるべき理念”を想像し、われわれはその理念に相応しく現実を書き換えることができる、そして実際に書き換えるべきだと確信する「世界観＝人間観」のことを指している。その中心にあるのは、人間存在にとっての「意のままになる生」の実現であり、ここではそれが「意のままにならない生」の現実を克服していく“人類の物語”として骨肉化されているのである^(注7)。確かにわれわれは、20世紀以来、哲学上のあらゆる形の近代批判が試みられてきたことを知っている。しかし「大きな物語」を送別しようとしたポストモダンにせよ、リベラルな価値体系を否定しようとした新反動主義にせよ、人間中心主義の克服を目指した「ポストヒューマンイズム」にせよ、「世界観＝人間観」の次元においては、実は一度も近代を乗り越えてなどいなかったとも言えるのである。

3) 「現実を否定する理想」と「無間地獄」

本論がこの〈無限の生〉の「世界観＝人間観」に着目するのは、その「世界観＝人間観」に由来する固有の問題が、リベラルな価値体系の否定者と擁護者の双方において受け継がれている側面があるからである。〈無限の生〉に基づく理想は、現実とは無関係に、現実の外部からもたらされた理念である。それゆえ、どれほど現実を理念に近づけようとも、両者が完全に一致するということは決してない。われわれはここで、理念から照射される現実を見て、この世界は間違っていると繰り返し痛感させられる。そうして目の前の現実を常に否定し続けていなければならなくなる^(注8)。この現実否定のプロセスには、決して終わりがいいからである。

こうして「現実を否定する理想」は、必然的にわれわれを「無間地獄」へと

突き落とすことになる。その様子を示す格好の事例は、戦後まもなくの日本で、丸山眞男らによって提起された「自立した個人」をめぐる問題である^(注9)。すなわち、われわれは外的な権威や権力によって流されることなく、自ら思考し、自ら判断できる自立した存在とならなければならない。そしてそのためには、個人を抑圧する外力を取り除くこと、とりわけ日本の伝統的な集団主義が克服されなければならない、といった主張である。思えば半世紀以上も前に提起されたこの言説が、いまなお変わることなく用いられていること自体、驚くべきことではないだろうか。100年前の庶民の生活を想起すれば、伝統、慣習、世間、隣人といった外力をめぐって、われわれがいかにそうしたもののから「解放されてきた」のかということが分かる。それにもかかわらず、われわれは未だに多くの問題を「自立していない個人」の問題へと還元し、個人をさらなる外力から解放しようとして躍起になっている。それは、「自立した個人」が現実の外部から導入された理念であり、それが「現実を否定する理想」として機能しているからなのである。

つまり、これと同じことが、ブライドッティを含むリベラルの擁護者の議論についても言えるのである。ここで「現実を否定する理想」として機能しているのは、あらゆる境界が存在していない世界、という理念である。その矛盾は、例えばマイノリティの解放を目的とした境界の解体が、そのマイノリティを定義するための新たな境界を創り出す「無間地獄」として、あるいは西洋との境界を取り除いた非西洋世界が、こぞってナショナリズムという新たな境界を創り出す「無間地獄」として、われわれがよく知るところでもある。しかし人々が依拠するのはあくまで理念の方であるために、そうした人々は、人間が本質的に境界を生みだす存在であること、どこかに境界を設けなければ、われわれは何ものをも語るができなくなるということ、そして人々が集団として生きていくためには、人々を名づける境界の物語が必要であるという現実を受け入れることができないのである。

新反動主義の場合はどうだろうか。もしかするとランドは、こうしたリベラル派の直面する「無間地獄」に気がついていたのかもしれない。その現実否定

がもたらす徒労感こそ、実は否定者たちが辟易していたものかもしれないのである。しかしランドは、結局愚痴をこぼすばかりで、ここにある「世界観＝人間観」こそが問題の本質であるということには気がつかない^(注10)。それゆえ「新官房学」なる、もうひとつの現実否定のユートピアに結局は耽溺してしまう。空間に配置された身体を持ち、生命体として生きなければならない人間にとって、自らの生活基盤を変更するということは、匿名のグループチャットから抜け出して、別のグループチャットに参加するのとはわけが違う。だがランドには、そもそもそうしたことへの興味が無いのである。彼の関心事もまた、結局は理念であって、それはあくまで現実の外側に存在するものだからである。

4) 「ポストヒューマン時代」における〈無限の生〉

以上の考察を経ることによって、われわれはようやく本論の当初の問題意識へと立ち返ることができる。前述したように、今日われわれは、科学技術を通じて、身体と機械、脳とAI、治療と人体改造との境界が曖昧となる時代を迎えている。そして「技術的なユートピア」か「技術的なディストピア」かを問わず、そこである種の「人間性」の揺らぎに直面しているのである。しかし意外なことに、こうした「ポストヒューマン時代」の技術的現実と、理念による現実の制圧を希求する、〈無限の生〉の「世界観＝人間観」とは、実はきわめて相性が良いのである。

繰り返すように、〈無限の生〉の「世界観＝人間観」の中心にあるのは、「意のままにならない生」の現実を克服できるという、「意のままになる生」の形而上学であった。そしてそこから産声をあげたのが、自由、平等、多文化共生といった理念を現実世界に具現化していく、“人類の物語”である。ここで考えてみてほしい。われわれは一連の技術的現実を、とかく欲望の肥大化などと関連づけてしまうが、その実「ポストヒューマン時代」とは、むしろその“人類の物語”の延長線上に存在するものであるとは言えないか^(注11)。例えば現代科学技術は、有史以来、はじめてわれわれの「意のままにならない身体」を「意のままになる身体」へと変えることを可能にした。それは、難病や障害に苦し

む人々にとっては、自らの自由と平等を勝ち取るための福音となるはずである。ならば同様に、老いに苦しむ人々、あるいは差別や偏見に苦しむ人々——そして言ってみれば生物学的な身体やその差異がもたらすあらゆる桎梏に苦しむ人々——に対して、彼らの自由や平等、共生を実現させるためにこそ、われわれはこうした技術が必要としているとは言えないか。つまり現代科学技術は、われわれの「人間性」を破壊しているのではない。〈無限の生〉の「世界観＝人間観」からすれば、事実とはまったくの逆であり、われわれは、あるべき「人間性」を実現するためにこそ「ポストヒューマンな存在」になるべきだ、ということになるのである。

実際ランドとブライドッティには、注目すべきもうひとつの共通点がある。それは彼らが、一連の技術を好意的に受け止め、人間が「ポストヒューマンな存在」となることを肯定している点である^(注12)。しかしそのこと自体は、まったく驚くに値しない。彼らにとって重要なのは、現実ではなく、“想像された理念”であって、それぞれの信じた理念を具現化できるというのであれば、その手段を阻止するいかなる理由も存在しないからである。

5. おわりに——〈有限の生〉からの再出発

こうしてわれわれは、〈無限の生〉の「世界観＝人間観」に立脚する限り、必然的に「ポストヒューマンな存在」へと誘われることになる。そしてそれが、本論から導出されたひとつの結論である。しかし本論では、「現実を否定する理想」が行きつく先には、結局「無間地獄」があるのみであるとも述べてきた。実際、この先われわれが、AIやロボットや生命操作を通じてどれほど身体の桎梏を取り除こうとも、われわれは結局「意のままにならない生」の現実からは逃れることができない。むしろ逃れられると信じ込み、逃れようと足掻くほどに、理想と現実との間の亀裂は致命的に開いていくことになる。そしてその「無間地獄」に終わりがあるとするなら、それはわれわれが生物学的な身体を完膚なきまでに打ち捨て、「タルバ」のごとき思念体のユートピアを完璧に築

きあげたときである、と言えるだろう。だがそれは、「あるべき人間性」なるものを完成させるために、人間が人間であることを文字通り投棄するという、矛盾の極地でもあるのである。

したがってもし、われわれがそれとは別の道を模索するというのであれば、われわれは〈無限の生〉とは異なる「世界観＝人間観」から出発する以外にはないだろう。例えば人間には、人間である限り、決して逃れることのできない何ものかが存在する。そうした「意のままにならない生」の現実を一度は肯定すること、そしてその現実に寄り添いながら、自らの「より良き生」とは何かを希求していく道があるはずである。それをここでは、〈有限の生〉の「世界観＝人間観」と呼ぶことにしたい。

こうした〈有限の生〉には、少なくとも以下の五つの原則を想定することができる。第一に、「生物存在の原則」、すなわち人間は人間である限り、生存に不可欠な生理的欲求、あるいは身体的老い、病、そして生物学的な死から逃れることができないこと、第二に「生受の条件の原則」、すなわち人間は人間である限り、生を受ける時代、場所、与えられる身体、親族、帰属する社会集団などを選択することができないこと、第三に「意のままにならない他者の原則」、すなわち人間は人間である限り、意のままにならない他者との関係性の負担を引き受けなければならず、それは自身が望んでいるかどうか、納得しているかどうかとは基本的には無関係であること、第四に「素朴な恵とわがわいの原則」、すなわち人間は人間である限り、情念や悪意、不誠実がもたらすわがわいに直面し、それに対処することが求められるということ、第五に「不確実な未来の原則」、すなわち人間は人間である限り、永遠で絶対的なものが存在しない現実のなかで、「より良き生」のあり方について模索し続けなければならないこと、といったようにである。もちろんこうした「世界観＝人間観」は、真新しいものには見えないかもしれない。それどころか、古から続く「普遍的」な「世界観＝人間観」は、むしろ〈有限の生〉の方であって、〈無限の生〉こそが特殊であったと言えるかもしれない^(注13)。その意味においてわれわれは、一度〈無限の生〉の最果てにまで至り、こうして改めて〈有限の生〉を「再発見」した

とも言えるのである。

もっともこのように述べてしまうと、あたかも本論が、理想を掲げて社会変革を志してきた人々の努力を否定しているようにも見えるかもしれない。しかし〈無限の生〉を肯定することは、人間存在が「より良き生」を求めて時代や現実と格闘すること自体を決して否定しない。重要なのは、「現実を否定する理想」とは異なる、「現実に寄り添う理想」というものが想定できるということである。理念と異なるという現実を否定する苦しみと、現実から出発して「より良き生」を生きようとするのがもたらす苦しみとでは、人間学的な意味はまったく異なっている。人間は生きる限り、目の前の現実と格闘しなければならぬ。そこで必要とされるのは、現実の外側にある理念でなく、現実と向き合う手向けとなる理想の形、そして意のままにならない自らの生を肯定できる「世界観＝人間観」の方なのである。

また本論が〈無限の生〉の「世界観＝人間観」を批判することから、あたかも本論が、現実に存在する不自由や不平等を軽視しているようにも見えるかもしれない。しかし本論は、社会的現実として自由や平等を切実に求めている人々がいることを否定しないし、筆者はそうした意味において、現代社会は紛れもなく制度的な改善を必要としていると考えている。本論が指摘しているのは、あくまで絶対的な理念を掲げて現実を裁断していく試みの限界であって、むしろ「より良き生」の形を希求した結果として、それがある種の自由や平等を拡大させることもありえるのである。人間は境界がなければ生きられないかもしれない。しかしその境界は、時間はかかるものの、時代の要請にしたがって引き直すことが可能なものである。現実から出発するということは、事実を規範によって塗りつぶすことでなければ事実から規範を引きだすことでもない。眼前の事実を一度は引き受けたうえで、われわれにとっての「より良き生」とは何かを真剣に問うこと、そしてそこから社会としてのひとつの決断を導き、その決断の責任を皆が負うということなのである。

本論では最後に、本論から派生する別の問題についても示唆しておくことにしよう。それはいまなお拡大し続ける〈無限の生〉の「世界観＝人間観」こそ

が、現代固有の「生きづらさ」の問題と深く連関している可能性があるということについてである。というのも、「人類の物語」として展開されてきた〈無限の生〉は、いまや多分に「個人の物語」としても肥大化している側面があるからである。この場合、「現実を否定する理想」がもたらす「無間地獄」は、自己決定し、自己実現できるはずの「あるべきこの私の生」という理念と、それを阻む「意のままにならない生」の現実との乖離として感受される。その矛盾は「ポストヒューマン時代」の技術的現実が、われわれの自己決定と自己実現の機会をよりいっそう拡大させること、すなわち「意のままになる他者」や「意のままになる身体」の契機を増大させることによって、より深刻なものとなっていくだろう。ここにあるのは、まさしく現実否定が引き起こす固有の「生きづらさ」の問題であって、それはおそらく人権擁護や富の再分配、抑圧の可視化や権力批判といった従来のアプローチだけでは解決できない問題なのである。

いずれにしても、この先われわれは「ポストヒューマン時代」の果てに、人間を捨てた「タルパ」たちのユートピアに行き着くのだろうか。それとも、〈無限の生〉から再出発した別の未来へと行き着くことになるのだろうか。われわれに問われているのは、こうした問題なのである。

[注]

(注1) 本論で展開されている、〈無限の生〉および〈有限の生〉をめぐる詳細な議論については上柿(2021a, 2021b)を参照のこと。また、「ポストヒューマン」については吉田(2022)も参照のこと。加えて、本論で言及するテクノロジーについてはヘロルド(2017)、NHKスペシャル「NEXT WORLD」制作班(2015)が網羅的で参考になる。「信用スコア」については、梶谷・高口(2019)を参照のこと。

(注2) カーツワイル(2007)。また、こうした立場を代表するものとしてトランスヒューマニズム(trans-humanism)を挙げることができる。

(注3) ハラリ(2018)。

(注4) ランド(2020)。なお同書では、後述するヤーヴィンが、ハンドルネームのM・モールドバグ(M. Moldbug)という名前で登場する。

(注5) プライドッティ(2019)。

(注6) ルソー(2005, p.207), Rousseau(1966, p.41)。

(注7) この「世界観=人間観」を、単純に永遠の命やトランスヒューマンを欲望する意識と同一視しないでほしい。〈無限の生〉は、確かに永遠の命やトランスヒューマンへの欲望を助長させるとはいえ、それはあくまでひとつの結果にすぎない。重要なことは、この「世界観=人間観」が、理想と現実とをめぐむわれわれの根源的な理解の枠組みに由来するものであるということである。なお、本論ではこれ以上は踏み込まないが、この「世界観=人間観」の背景には、おそらくルネッサンス期以降のキリスト教的な「世界観=人間観」が深く関わっている。それは、神の似姿として創造され、神が計画したあるべき理想世界をこの地上に具現化する使命と能力とを与えられた、特別な被造物としての人間のイメージである。

(注8) 増田 (2020) は、このことを「万能の否定論」と表現している。

(注9) 丸山 (1961)。

(注10) 例えばランドは、「もし事実が理論に適合しないなら、悪いのは事実の方なのだ」というヘーゲルの言葉を引いているが、それを体現しているのは他ならないランド自身でもあるのである (ランド 2020, p.73)。

(注11) 筆者は、「ポストヒューマン時代」の到来を、いわゆる“功利主義”の展開、すなわち“欲望の全肯定”や“効用の極大化”といった形では理解していない。もちろんそこにはそうした側面も存在するのだが、ここではそれ以上に、われわれが自らの思う理念としての「あるべき人間 (人間性)」を実現しようとするからこそ、われわれは「ポストヒューマンな存在」になるべく進んでいる側面がある、ということを強調しているためである。

(注12) ランド (2020, pp.255-256), ブライドッティ (2019, p.92, pp.300-301)。もっとも、両者が技術を肯定する文脈には違いも存在する。ランドの場合は、「意のままにならない身体」を超越することが人種問題などの生物学的な桎梏を無効化し、そのことがリバタリアンのユートピアの建設に貢献するからである。これに対してブライドッティの場合は、科学技術が“人間的な存在”と“非人間的な存在”の間に位置する多様な存在を出現させることによって、前述した「あらゆる境界が存在しない世界」のリアリティが向上するからである。

(注13) 本論ではこれ以上踏み込まないが、筆者は多くの伝統的な「世界観=人間観」——例えば仏教、あるいは古代キリスト教でさえ——の根幹にあったのは、〈有限の生〉の「世界観=人間観」であったと考えている。その意味においては、人間において一般的だったのは、〈有限の生〉=「現実寄り添う理想」の方であって、〈無限の生〉=「現実を否定する理想」こそが特殊なものだったのではないかと、ということである。

[参考文献]

- 上柿崇英. 2021a. 『〈自己完結社会〉の成立—環境哲学と現代人間学のための思想的試み (上巻)』農林統計出版。
- 上柿崇英. 2021b. 『〈自己完結社会〉の成立—環境哲学と現代人間学のための思想的試み (下巻)』農林統計出版。
- NHKスペシャル「NEXT WORLD」制作班. 2015. 『NEXT WORLD—未来を生きるためのハンドブック』NHK出版。
- カーツワイル, R. 2007. (井上健監訳, 小野木明恵, 野中香方子, 福田実訳), 『ポストヒューマン誕生—コンピュータが人間の知性を超えるとき』NHK出版. (Kurzweil, R. 2005. *The Singularity is Near: When Humans Transcend Biology*. Viking.)
- 梶谷懐, 高口康太. 2019. 『幸福な監視国家・中国』NHK出版新書。
- ハラリ, Y. 2018. (柴田裕之訳), 『ホモ・デウス (下) —テクノロジーとサピエンスの未来』河出書房新社. (Harari, Y. N. 2017. *HOMO DEUS: A Brief History of Tomorrow*, HarperCollins.)
- ブライドッティ, R. (2019). (門林岳史監訳, 大貫菜穂, 篠木涼, 唄邦弘, 福田安佐子, 増田展大, 松谷容作訳), 『ポストヒューマン—新しい人文学に向けて』フィルムアート社. (Braidotti, R. 2013. *The Posthuman*, Polity.)
- ヘロルド, E. 2017. (佐藤やえ訳), 『超人類の時代へ—今, 医療テクノロジーの最先端で』デイスカヴァー・トゥエンティワン. (Herold, E. 2016. *Beyond Human: How Cutting-Edge Science is Extending Our Lives*, St. Martin's Press.)
- 増田敬祐. 2020. 「存在の耐えきれない重さ—環境における他律の危機について」『現代人間学・人間存在論研究』大阪府府立大学環境哲学・人間学研究所, 第4号, pp.313-378.
- 丸山真男. 1961. 『日本の思想』岩波新書
- 吉田健彦. 2021. 『メディアーム—ポストヒューマン時代のメディア論』共和国
- ランド, N. 2020. (五井健太郎訳), 『暗黒の啓蒙書』講談社. (Land, N. 2012. *The Dark Enlightenment*, <https://www.thedarkenlightenment.com/the-dark-enlightenment-by-nick-land>.)
- ルソー, J. J. 2005. (小林善彦, 井上幸治訳), 『社会契約論』『人間不平等起原論/社会契約論』中公クラシックス. (Rousseau, J. J. 1966. *Du Contrat Social*, Garnier Flammarion.)

Summary

With the advancement of contemporary technology, the boundaries between the body and the machine, the brain and AI, and medical treatment and body modification have become blurred, and we are entering a "post-human era" in which the concept of

"human", which has been considered obvious, is no longer valid.

In order to explore the essence of the "post-human era", this paper focuses on the conflict between neo-reactionism and post-humanism over liberal value system. This is because the root of the conflict lies in the different understandings of "humanity" established in Western modernity, and the "post-human era" refers to the era of technological manipulation of the very foundation of "humanity".

Strangely, both deniers and defenders of the liberal value system affirm that we modify ourselves through technology and become "post-human beings". This is because they both start from the idea of the "ideal human (society) " that exists outside of reality and share the "world-view/human-view" of <infinite life> that says that reality itself should be repainted by the ideal.

However, the "world-view/human-view" of <infinite life> must continually seek the "ideal human (society) " and continually deny the reality of human beings (society) . As an extension of this, we will increasingly wish to abandon our bodies and become "post-human beings". However, because it is a kind of "continuous hell", it will never end. What is required in the "post-human era" is the "world-view/human-view" of <finite life>, which starts from reality, not from ideal. In other words, we need to go back to the ontological roots of what we must take on as long as we are the human and look again at the meaning of that. This is where a true critique of modernity begins.

Keywords : post-human, post-humanism, humanity, neo-reactionary, "world-view/human-view" of <infinite life>

(2021年10月27日受付)

(2022年 2 月13日受理)